

## ①鎌田委員提出資料

「ふるさと考」～ふるさとづくり有識者会議のたたき台として～ 鎌田東二 2013年4月11日

### 1、はじめに

わたしは宗教哲学・民俗学・日本思想史・比較文明学などの学問領域を研究してきた者であるが、この10年あまり、財団法人地域創造と総務省の「地域伝統芸能まつり実行委員会」（発足：1999年、HP；<http://www.jafra.or.jp/matsuri/top.php>、座長：梅原猛）の委員、京都市と市民で進める「京都伝統文化の森推進協議会」（発足：2008年、会長：山折哲雄、HP；<http://www.kyoto-dentoubunkanomori.jp/index.html>）の副会長・文化的価値発信専門委員会委員長、NPO法人東京自由大学（設立：1999年2月、所在地：東京都千代田区神田紺屋町5、HP；<http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/>、学長：海野和三郎東京大学名誉教授・天文学者）の理事長を務め、いくらかなりと「地域」に関する研究と実践に携わってきた。

その経験を踏まえて「ふるさとづくり有識者会議」において、「ふるさとづくり」のためのたたき台となる「ふるさと像」の提示を求められた。そこでこの機会に、試論的に「ふるさと像」と「ふるさと問題」を提起し、活発なる議論の誘発剤としていただきたいと思う。

アメリカ先住民は「七世代先のことを考えて行動する」と言われるが、わたしたちも先人の仕事を受け継ぐ（歴史・伝統）と同時に、それをてことしつつより豊かに展開し未来に接続する責務を持つ。少なくとも、孫やひ孫の代や100年先のことまでイメージし視野に入れつつ、未来からのバックキャストイングをしながら現在を創造し、生き抜かねばならないだろう。

そこでまず、「ふるさとづくり」を考える際に想定しておくべき3つの問題を挙げておきたい。

第一に、気象変動・地球環境問題。今後起こってくる可能性のある地震・津波・台風・洪水・火山噴火・疾病など、自然災害多発地帯である列島における「ふるさとづくり」の意識と方法と地域間協働のあり方を模索しなければならないということ。今日、気象や地震・火山活動を含め、地球全体が大変動期を迎えていると考えられている。そうした「想定外」の現象が起こりうる近未来の中で「ふるさとづくり」を考え、実施しなければならないということ。変動的な地球環境問題の中にある「ふるさとづくり」への取り組みが必要であるということである。

第二に、食糧問題。生の根幹は食にあるが、一定の食糧自給率や食（文化）と生存可能環境のデザインが求められていること。「想定外」の不測の事態に立ち至った時の喫緊の最小必要資源となるのは、阪神淡路大震災でも東日本大震災でも明らかになったように、水と食糧とそれを運搬する交通網である。そうしたライフラインの確保と持続的配給を想定した「ふるさとづくり」が必要であるということ。

第三に、少子高齢化問題。将来間違いなく日本の人口は減少する。その人口構成は少子高齢化がどの国よりも進む、これまでの人類社会が経験したことのないような未曾有の超少子高齢化社会に突入する中での「ふるさとづくり」であること（参照：長谷川敏彦「生存転換」論<sup>①</sup>）。

こうして、未来社会や未来世代のためにも、「ふるさと」を空疎な合言葉にするのではなく、実質のある現実にするためのビジョンと努力と具体的な実施計画が求められている。

そしてそれは、具体的には、「ふるさと」の当事者である、市町村などの地域単位、あるいは地域間単位の取り組みによって具現化されなければならないのであるが、国が関与するのはそのどの部分であるのか、枠組みであるのか、予算配分であるのか、共通する最大公約数的なモデル像の提示であるのか、議論し明確にすべきであること。もちろん、「ふるさとづくり」の実質的な担い手は地域・地方に住む住民当事者である。

また、ローカルな地域の問題を考える際に、グローバルな地球史的・文明論的・文明史的な視野も必要である。このことも常に念頭に置いておくべきである。加えてさらに複雑で流動的な外交問題や現代資本主義のグローバル経済の動向が加わってくるので、一国内の「ふるさとづくり」がさまざまな「外因」により大きな影響を蒙らざるをえないことも想定しなければならない。

そうした諸問題を睨み、同期的に取り組みつつ、これからの「ふるさとづくり」のビジョンを議論し構想しなければならない。

## 2、「ふるさと」の原像～古典(記紀:『古事記』712年編纂、『日本書紀』720年編纂)から探る

一般に、わたしたちはどのような「ふるさと」のイメージを持っているかといえば、文部省唱歌の次の歌「ふるさと」が代表的な一イメージであろう。

兔追ひし彼の山  
小鮒釣りし彼の川  
夢は今も巡りて  
忘れ難き故郷

如何にいます父母  
恙無しや友がき  
雨に風につけても  
思ひ出づる故郷

志を果たして  
いつの日にか帰らん

山は青き故郷  
水は清き故郷

作詞：高野辰之、作曲：岡野貞一とされるこの歌は、大正3年（1914）より尋常小学校唱歌として歌われ始めた。

この歌で注目すべきは、「ふるさと」の山と川ないし水が1番と3番の最初と最後にくりかえし印象的に歌われていることである。ここでは、清く美しい「山と川・水」が「ふるさと像」の核をなしている。加えて、「父母」や「友」がふるさとにおける人間関係の要として歌われている。わたしとしては、この「ふるさと」像に「祭り」を加えたいところであるが、そのことは再度後述するとして、この「山」と「川」の「ふるさと」イメージの原像を探っておきたい。

この「ふるさと像」の原像をどこに求めるべきか、最古の古典『古事記』から「ふるさと」の「原像」を求めるとすれば、次のヤマトタケルノミコト（倭建命、日本武尊）の「国偲びの歌」になるだろう。

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山籠れる 倭し うるはし

（大意：わたしのふるさとである大和は、この上なく美しく吉い土地だ。そこには、幾重にも青々とした山並みが連なり、重なり合って、自然の垣に取り巻かれているように護られている。ふるさと大和は、なんて麗しく吉き土地なのだろう。ああ、懐かしいなあ。）

「まほろば」とは「美しく吉き土地」という意味であるが、大和の国におけるそのような美しき吉き地は何重にも清き青き緑なす山々に取り囲まれていることと表現される。そしてその大和の地には長谷川（初瀬川、合流して大和川）が流れている。こうして、「国のまほろば」には、文部省唱歌の「ふるさと」と同様、青い山と清い川が欠かせないことがわかる。

かつて、米山俊直（1930～2006年、文化人類学者・京都大学教授）は『小盆地宇宙と日本文化』（岩波書店、1989年）の中で、岩手県遠野市の遠野盆地を基本モデルとし、「小盆地を中心とする文化領域は、いわばひとつの世界である。この世界を、私は『小盆地宇宙』という名で呼ぶことにしている。小盆地宇宙とは、盆地底にひと、もの、情報の集散する拠点としての城や城下町、市場を持ち、その周囲に平坦な農村地帯をもち、その外部の丘陵地帯には棚田に加えて畑地や樹園地をもち、その背後に山林と分水嶺につながる山地をもった世界である。典型は遠野のように、孤立して四方が尾根に取囲まれているが、盆地に集まった水は一方の方角から盆地の外へ流出している。このような地形を特徴とする世界で、住民が構築してきた精神世界を、小盆地宇宙と呼ぶのである。この小盆地宇宙は、

それぞれ個性を持ちながらも、同時に歴史時代の千年に先立つ数千年、ないし一万年ほどの先史時代の記憶をその空間のなかに残存させていて、それが弥生時代以降の歴史と重なりあい、いわば統合されているという点では共通性を持っている」（12頁）と日本の村や町の基本形を千年・万年単位の「記憶」を持つ「小盆地宇宙」ととらえた。当然、「小盆地」は山々に取り囲まれており、そこを水源とする川にも恵まれている。

とすれば、文部省唱歌の「ふるさと」もヤマトタケルノミコトの歌う「国のまほろば」も文化人類学者の米山の言う「小盆地宇宙」も、同じ基本構造を持っているといえる。

これを1200年余の長期にわたって日本の首都であり続けた平安京・京都に当てはめてみるとどうであろうか？

京都は、東山・北山・西山の三方を山に取り囲まれている。また、東（左京区）に賀茂川、西（右京区）に桂川が流れている。そして、すり鉢型のような盆地である。まさに文部省唱歌や米山「小盆地宇宙」と同型である。

延暦13年（西暦794年）に、桓武天皇は長岡京から平安京に遷都したが、その時、次のような詔を出した。「此国山河襟帯、自然作城。因斯勝、可制新号。宜改山背国、為山城国。又子来之民、謳歌之輩、異口同辞、号曰平安京。（この国、山河襟帯、自然に城を作す。この形勝によりて新号を制すべし。よろしく山背国を改め山城国となすべし。また子来の民、謳歌の輩、異口同辞し、平安京と号す。）」（『日本紀略』）。

この桓武天皇の詔にあるように、京都盆地の三山（東山・北山・西山）の「山」は「襟」のように立っており、賀茂川や桂川などの「川」は東西にあつて南北に「帯」のように優雅に流れている。それは、「自然に城を作す」自然の要塞のような場所であるが、やさしく優雅な「帯」を締めており、もっと象徴的にいえば、風水的に、山＝陽・男性性と河＝陰・女性性との調和がとれた絶妙の吉祥地である。この「景勝」を桓武天皇は自然の「山城」と見、そこにこそ「平安」の「京」が建設されるという期待と祈りを込めたのである。

東日本大震災「3・11」後の救援活動やボランティア活動の拠点になったのが岩手県遠野市であったが、その遠野が京都・平安京と同じ「小盆地宇宙」を持っていたことに注目しておきたい②。

だが確かに、その後の歴史過程で、この「平安京」に御霊信仰や怨霊信仰が流行し、また地獄や末法思想が広がり、「平安京」ならぬ「不安京」であったことも事実である。また、その「平安」の形成に際して坂上田村麻呂らによる東国の「蝦夷」制圧が加えられ、その支配と服従の構造や地域間格差の中での「平安京」の確立と維持であったことも忘れてはならない。

とはいえ、「みやこ」が千年以上も続いたということ自体が、長期的に見れば、そこに「平安」すなわち持続可能な社会構造と平和や安らぎがあったことを意味している。これほど長期にわたって「平安京」が「みやこ」であり続けた、持続千年首都・平安京の長期的維持には次の5つの機能的要因があったとわたしは考えている。

その持続千年首都・平安京の維持システムとは、

- ① 水の都（水脈・水量・生態系の豊富さ）
- ② 祈りの都（神社仏閣など祈りと癒しの空間の集中）
- ③ ものづくりの都（高度技術者集団の活躍とネットワーク）
- ④ 里山文化の都（居住空間とそこから少し離れた山系とのインタラクティブな活性関係）
- ⑤ ネットワークとしての都（統治システムの中での地方との相互公益的な交通・交換関係）

という 5 特性ないし 5 要因である。

まずそこは、資源という観点から見て一定の水準を満たしていたということ。賀茂川や桂川だけではなく、豊富な地下水が貯蔵されていることが、日常生活を安定的に支え、酒の醸造、染織・織物、京料理など、京都の伝統文化・伝統工芸を作り上げる基盤となった。そして、その水を担保し保障する神々が、上賀茂神社（賀茂別雷神社）や下鴨神社（賀茂御祖神社）や貴船神社や松尾大社の神々であった。東方・北方・西方の水系の神々と神社に加え、南方には神泉苑や巨椋池があり、平安京・京都はまず何よりも豊かな水資源とネットワークを持つ「山城」の「水都」であったことが最大の安定要因であった。加えて、東山山系を東に越えると琵琶湖があつて日本海へと通じ、淀川を南に下ると摂津の海から瀬戸内海や太平洋に出ていくこともできる。このように、「山城」ではあつても、交通の面でもさしたる不自由はなかったのである。

その「水都」は同時に、「祈都」「祭都」であった。官祭・民祭・私祭など、さまざまなレベルで祈りや祭りが行われた。官祭として最大のものは、両賀茂神社の賀茂祭すなわち葵祭であった。とりわけ、「葵」は平安京・京都の「平安」と生命力の象徴となった。そして、民祭として最大のものは、八坂神社（祇園社）の祇園祭である。

祇園祭は、貞観 11 年（869）に卜部日良麿が 66 本の矛を立てて諸国の悪霊を移し、その穢れを祓い、牛頭天王を祀って御霊会を行なったことに始まるとされ、室町時代以降は町衆の力で山鉦巡行や祇園囃子が組織化され、現在の祇園祭につながるダイナミックな形態が生まれた。

そもそも、権力が集中する首都は、人口増加に加え、飲料水と下水の衛生的な管理が不可欠となるが、都市が荒れるとその管理も滞り、さまざまな疾病が流行することになる。そのような、いつ何時降りかかってくるかわからない災厄を免れることができなければ、安定した首都を維持することはできない。祇園祭はそのような首都の安定化に官民挙げて取り組んだ平安京の新しい祭りの創造であったといえる。

この持続千年首都・平安京に息づいている伝承知を、わたしは「平安京生態智」と呼んでいる。「生態智」とは、「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バラ

ンス維持システムの技法と知恵」である。

豊かな山河に抱かれた祈りの都としての平安京には、両賀茂神社や松尾大社や伏見稲荷大社や広隆寺など、賀茂氏や秦氏が担ってきた寺社が重要な意味を持っていたと同時に、京都盆地のランドマークともなっている鬼門の霊山・比叡山が重要な安定機能を担った。また、辻辻の地藏や観音などの小祠が安定的な生活文化を支える安心装置として重要な意味と社会的機能を果たした。そこでの民衆のささやかな祈りや祭りが、さまざまな破局や破壊から立ち直り、回復していく社会復元力の元ともなっているからである。大社や官祭は、都城建設においてまた国家運営において大きな世界の座標軸の設定を担い、民祭や私祭は庶民の生活文化に潤いと彩りを与えたのである。

もちろん、平安京にはさまざまな混乱や戦乱や山林の濫伐などの自然破壊もあったが、周囲の山並みの野生をうまく里山文化として取り込み、祈りや祭りやものづくりという文化創造都市を形成した。「3・11」後のさらに不安定さや破局的様相を見せている日本社会や国際社会の中で、持続首都千年首都・平安京/京都の位置と意味と役割は増大していると思う。

その平安京・京都の自然と文化の総体を 21 世紀の新たな「世界平安都市」文明モデルの一つとして再措定してみることに将来的な意義があるだろう。平安京を都として千年以上にわたり維持してきた物質的基盤（水、食料、燃料、材木、ゴミ問題、ヒトの流れ）と技術的基盤（芸術、技芸、学問）と精神的基盤（宗教、象徴性、呪術性、霊性）を総合的に解明しつつ、東山三十六峰を中心に展開したモノとワザの諸相と歴史を掘り起こしつつ、古代、中世、近世、近代という時代の変遷の中で「京」という「都」が発信してきた時代的メッセージと力を将来的なビジョンとともに解き明かすことは未来の「ふるさとづくり」への貴重な参考事例となるだろう。

余談であるが、京都大学がなぜ日本の大学の中でかくもノーベル賞受賞者が多いのかという質問に対する答えとして、それは京都大学が位置している持続千年首都・平安京/京都の地場と知の蓄積の力であると答えることができるのではないかと思う。祇園祭や比叡山延暦寺や吉田神社の大元宮など独創的な祭りや寺社や芸能を生み出し続けたアヴァンギャルドな精神と工夫が京都には知的・地的財産/遺産として継承されている。そうした知/地的遺産の土壌の上に京都大学の科学者・学者たちの知的生産も支えられている。このような「知的活力」や「知的創造力」の渙発という面でも、平安京・京都を未来の「ふるさとづくり」の一指標にすることは意味があるだろう。

さて、「ふるさと」の原像として、不可欠の要素に地域地域の個性的な「祭り」がある。

その祭りの原型は、『古事記』では、いわゆる「天の岩戸神話」と呼ばれる場面で行われる「神事」（神懸り・鎮魂・神楽・俳優・芸能の始まり）であるが、『日本書紀』ではイザナミノミコト（伊邪那美命、伊弉諾尊）が「火神」を生んだ後、「神退去（かむさり）」つまり死去した際に、「紀伊國の熊野の有馬村に葬（はぶ）りまつる。土俗（くにびと）この神の魂（みたま）を祭るには、花の時にはまた花を以て祭る。また鼓（つづみ）・吹（ふえ）・

幡旗（はた）を用（も）ちて歌舞（うたひま）ひて祭る」と出てくるのが、「祭り」の初出である。つまり、死者の「鎮魂」（仏教的に言えば「供養」）としての「葬祭」として「祭り」が行なわれ、そこに旗を立てられ、花が咲く時には花が供えられ、笛や太鼓が奏でられて、「祭り」が行なわれたのである。

「3・11」後の「ふるさと」の祭りを考える際にも、この『日本書紀』の「祭り」の事例は大変参考になる。というのも、多くの死者と行方不明者を出した東日本大震災後に、住民の心を慰め、鎮め、活気をもたらしたのは、仏教的な死者供養と神道的な祭りや地域伝統芸能であった。日本の「村（熊野有馬村）」では「神代」の昔から「祭り」が欠かせなかった。ちなみに、現在、三重県熊野市有馬の地には、このイザナミノミコトを祀る花窟（はなのいわや）神社が鎮座している。

### 3、「ふるさと」の原像と現在～人気アニメ(宮崎駿監督『となりのトトロ』1988年製作、『千と千尋の神隠し』2001年製作)から探る

「ふるさと像」を歴史的・地域具体的に検証することにはそれ自体、精査のための大変な時間と労力がかかるので、ここでは、「ふるさと像」を鮮明にする便法として、「ふるさと」の原像とその変遷を、人気アニメの『となりのトトロ』と『千と千尋の神隠し』を比較することによって浮かび上がらせてみよう。

『となりのトトロ』（1988年製作）と『千と千尋の神隠し』（2001年製作）は、共通構造と対照性の両面を持っている。

#### A：共通点

- ① 引っ越しの場面の共通性
- ② 子どもが異界に入り込むことの共通性（トトロの世界と湯婆婆や神々の世界）
- ③ 自然神（「森のヌシ」と呼ばれたトトロ、「腐れ神」とも「川のヌシ」とも呼ばれた老龍）と子どもとの交流・交歓という共通性

#### B：相違点

- ① 時代～昭和30年代と平成時代の違い
- ② 両親と子どもの親子関係の違い
- ③ 共同体の絆の有無の違い
- ④ 里山と里の風景の違い（伝統的な村のたたずまいと宅地造成された新興住宅地）
- ⑤ その里山で「神」を祀る社（祠）がどのようになっているかの違い
- ⑥ 「神」自体の活動の違い
- ⑦ 機械化・電化の違い（オート三輪のミゼットと快適な四輪自家用車）

この2つのアニメーションは、昭和30年代と平成10年代の戦後50年経った日本社会のありようの変化をきわめてわかりやすくかつ印象的に描き出すことに成功している。

『となりのトトロ』では、村の入り口にあるお稲荷さんやバス停の稲荷前のお稲荷さんや村の辻や通学路や村境に位置するお地蔵さんや六地蔵さんが見事に描き分けられていて、村の自然・社会景観がノスタルジックなまでに巧妙に描かれている。日本人の民間信仰の日常と生活文化と生活風景が生き生きと活写されているといえる。

実は、この楠木の洞に棲む「トトロ」が日本の「カミ」の原像である。タイトルともなっている「トトロ」は、日本の民間信仰や宗教学や民俗学の観点から見ると、紛う方なく日本の「カミ」である。もちろん、「トトロ」は楠木の洞を棲み処とする森の動物として描かれているのであるが、単なる動物ではない。動物の姿を持って立ち現われる不思議な存在、「カミ」である<sup>③</sup>。

日本人にとって「カミ」とはいかなる存在であるかを考える際に、本居宣長が『古事記伝』巻三に、「凡て迦徼とは、古への御典等に見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其余何にもまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて畏こきものを迦徼とは云なり。すぐれたることは、尊きこと善きこと、功しきことなどの優れたるのみを云に非ず。悪しきもの奇しきものなども、よにすぐれて畏きをば、神と云なり」と記していることが参考になる。

本居宣長は、古典に記された神と表記されるカミ、神社に祀られた諸霊のカミ、鳥獸木草・海山など何事においても優れたところのある畏こきもの、それらはみな「カミ」だと述べている。平たく言えば、「カミ」とは「超すごいモノ」であり、日本人が抱いてきたある特定の聖なる感情や情報や力や現象など霊的各ファイルすべてをまとめて取り込む「聖フォルダ」である。

たとえば、イカヅチ（雷神）・カグツチ（火神）・ノヅチ（野神）・ククノチ（木神）・ミズチ（水神）などの「チ」系ファイルのカミガミ、ヤマツミ（山神）・ワダツミ（海神）などの「ミ」系ファイルのカミガミ、ムスヒ（産霊）・ナオヒ（直霊）・マガツヒ（曲津霊）などの「ヒ」系ファイルのカミガミ、アメノミナカヌシ（天之御中主）・オオクニヌシ（大国主）・コトシロヌシ（事代主）・ヒトコトヌシ（一言主）など「ヌシ」系ファイルのカミガミなど、「ヤオヨロズ（八百万）」と言われるほど多くの多様なカミガミを総称・総括する統括ファイルとしてのフォルダが、日本の「カミ」なのである。

こうして、自然の森羅万象の動きとはたらきの中に靈性・靈威・神性・神威の生成と顕現を見てとる感知力が、最終的に、「カミ」という「フォルダ」の中に折りたたまれ、束ねられていった。

わたしは、そうした日本の「カミ」観が縄文時代の精霊的信仰から現代のトトロ像まで日本列島の宗教文化の基層信仰を成していると考えているが、『となりのトトロ』が縄文的な基層信仰をふんだんにちりばめていることに注意しておきたい。

その一つが、「ドングリ」である。森をいのちの海ととらえ崇拜してきた日本文化におい



て、「ドングリ」はまず縄文人の主食として現われてくる。ドングリのアク抜きをするために縄文土器は作られた。その「ドングリ」を通してメイは「森のヌシ・トトロ」と出会ったのである。

「森のヌシ」は、『古事記』や『日本書紀』などにも描かれた天之御中主神や大国主神や事代主神や一言主神などの「主神」とも関連する、「森の主神」である。その「森のヌシ神」のトトロが、注連縄の張られた大楠の洞<sup>むろ</sup>の中に棲んでいる“ヌシの神”である。沖縄でも、「ニラーハラー（ニライカナイ）」の太陽のヌシの神を「ウプヌシガナシー（大主神）」と呼んでいるが、「森のヌシ神」がトトロなのである。

メイの父（草壁タツオ・縄文考古学者）はトトロと遇ったと言い張るメイに、「メイはきっと、この森の主に会ったんだ。それはとても運がいいことなんだよ。でも、いつも会えるとは限らない。」と諭す。

都会から郊外へ引っ越しして来たこの一家は、この後、「鎮守の森」である「塚森」に挨拶に行く。そこには、メイがトトロと出会った巨大な楠木がすくと立っていた。メイは思わずその樹に駆け寄るが、そこには「孔」はない。それは、この世から見た楠木の風景だからである。トトロの側から見たら、巨木の根元には出入り口となる「孔」がある。だが、その「孔」の代わりに、この世には小さな祠（神社）がある。神主さんも住んでいないその神社は、村の人が守っている小さな「鎮守の森」である。

姉のサツキは、自分もトトロと会いたいと言う。すると、草壁パパは、「そうだな。運がよければね。立派な木だなあ。きっと、ずーっとずーっと昔から、ここに立っていたんだね。昔々は、木と人は仲よしかったんだよ。お父さんは、この木を見て、あの家にとっても気に入ったんだ。お母さんも、きっと好きになると思ってね。」と子供たちに言い、「さっ、お礼を言って戻ろう。」と二人を促し、「気をつけ。メイがお世話になりました。これからもよろしく願いいたします。」とペコリとおじぎをする。この場面は、宮沢賢治の『注文の多い料理店』の中の童話「狼森と策森、盗森」を想起させる。森の近くに引っ越してきた農民たちが森の「ヌシ」たちにお供えを捧げて挨拶するのだが、まさにこの草壁一家の行動パターンと同じ心意と行動様式であった。そしてそれは、今なお引っ越しや新築に際し地鎮祭を行なう心意ともつながっている。自然と人間との付き合い方の礼儀、マナーがつつまじやかにかつ奥床しく表現されている。

わたしはこの草壁パパのモデルの一人は南方熊楠だったと考えているが、その当否はともかく、鎮守の森→トトロ→大物主神→三輪山とリンクする生態学的サークル（美輪）を護ろうと「神社合祀反対運動」をラディカルに展開したのが、「熊」という動物と「楠」という植物の名前を持つ、トトロ的円環の守護者と言える南方熊楠であった。

熊野の入り口に当たる海南市の藤代王子社の境内社・楠神社の宮司に名前を付けられた南方熊楠は、今からちょうど一世紀前の1910年ごろ、生態学と民俗学の研究に基づきつつ神社合祀反対運動を展開した。明治政府は、神社を行政単位である一町村に一社に統合整理しようとした。そうすると、古くからある「鎮守の森」のような里山や小さな森の社や

祠はすべてなくなってしまう。これは、「ふるさと」の「トトロ」を森から追い出してしまふ仕業（しわざ）である。

森の守護者である南方熊楠によると、神社合祀は、①敬神思想を薄め、②民の和融を妨げ、③地方を衰微させ、④国民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を害し、⑤愛国心を損ない、⑥土地の治安と利益に大害があり、⑦史蹟と古伝を滅却し、⑧天然風景と天然記念物を亡滅する。つまり、日本人がこの日本列島の風土の中から感受・感得してきた「カミ」に対する感覚をないがしろにしてしまう浅薄皮相きわまる無謀なる政策であるということになる。

こうして南方熊楠は、激烈な神社合祀反対運動を展開するのであるが、その論理はまことに体系的かつ網羅的で、「神社合祀」という上から目線の官僚（お上）的な行政がゴリ押しする強制的暴力的政策の問題点と欠陥を鋭く深く突いていて、その論理は未来的意味を持っている。

この点で、南方熊楠と宮沢賢治は日本近代における「生態智」思想探究の先駆的实践者である。熊楠は、「わが国の神社、神林、池泉は、人民の心を清澄にし、国恩のありがたきと、日本人は終始日本人として楽しんで世界に立つべき由来あるを、いかなる無学無筆の輩にまでも円悟徹底せしむる結構至極の秘密儀軌たるにあらずや」と述べ、また「神社の人民に及ぼす感化力は、これを述べんとするに言語杜絶す。いわゆる『なにごとのおはしまつかは知らねども有難さにぞ涙こぼるる』ものなり」、「野外博物館とは実は本邦の神林神池の二の舞ならん」と述べている。

つまるところ、神社の森、すなわち「鎮守の森」は、日本の誰の心にも清らかな感覚と日本の風土の良さを感得させ、誇りを持たせる魔法の力を持っていると主張したのである。そしてそれは日本人の「カミ」感覚の基盤をなし、現代の「野外博物館」の先駆モデルであると喝破したのである。

しかもこのとき、南方熊楠は、「殖産用に栽培せる森林と異（かわ）り、千百年来斧近を入れざりし神林は、諸草木相互の関係はなはだ密接錯雑致し、近ごろはエコロジーと申し、この相互の関係を研究する特種専門の学問さえ出で来たりおることに御座候」とか、「昨今各国競うて研究発表する植物棲態学 ecology を、熊野で見るべき非情の好模範島（神島のこと）」とかと述べ、いち早く「エコロジー」という言葉を使って生命の宝庫としての神社の森（鎮守の森）を護り、社会運動を生態学的な生命研究と接合しているのである。

1000年単位で樹を伐らずに護ってきた「神林」は、いろいろな草や木が相互に「密接錯雑」し、エコロジカルな相互関係や円環性を持っている。その典型が田辺湾に浮かぶ美しい島「神島」であると主張した。世界を護るためには各地域のローカルで小さな森を守らなければならない。コミュニティの生産と消費、つまり地産地消の原点は、山・森（奥山・里山）—野原—田畑—川—海の連環の中にある。「カミ」は小さな「地域の森」の細部に宿り給うと主張したのである。

だが、そのようないわゆる「鎮守の森」は、『千と千尋の神隠し』になると、限りなく弱

体化している。『となりのトトロ』も『千と千尋の神隠し』も、映画はともに引越し場面から始まるが、両者は対照的に描かれる。

元気のよい子供（メイとサツキ）と何事にも興味を持たない子供（千尋）の対照性。子供の世界がわかって一緒に遊べる親（草壁パパ）と子供の世界がわからない自分勝手な親（千尋パパ）の対照性。そして、千尋の両親は、勝手に飲み食いして「豚」になってしまふ。しかも、トトロが棲んでいたような森は切り崩され、宅地造成されて、神の住処よりも人の住処の方が上に立っている。そこでは、「神の家」（祠や神社）は打ち捨てられ、注連縄を張っていた神木も朽ち果て、鳥居も傾いている。

忘れられた「神の家」。そこでは、カミガミも汚れ、疲れ、「癒し」を求めている。癒しの湯屋を訪れてくる「腐れ神」（とされたカミ）は、本当は「名のある河のヌシ」であり、「翁神」でもあり「老竜」でもあったのだが、一見すると、「腐れ神」になってしまっていた。それが、まさに現代の風景であり、時代状況であることを宮崎駿は鋭く告発している。

「千尋」は「千」と名前を変えられたことで、魔女に支配される事になるという設定には言葉や名前の重要性の思想が見られるが、「ハク」の本当の名前が「ニギハヤミコハクヌシ」であり、河の「ヌシ」神であるところも重要である。だが、今日的風景と社会風潮として、千尋の父母は浅ましい欲望過多な物質主義的現代人のカリカチュアとして描かれている。それは、現代を生きるわれわれ自身の自画像とも言えるだろう。

ここで、総括的に、宮崎駿の主たる作品を次のように解釈しておく。

- ① 日本の神々および宗教文化の原風景・原像としての『となりのトトロ』
- ② 日本の神々および宗教文化の弱体化・衰退と蘇りの希求としての『千と千尋の神隠し』
- ③ 日本の古層の神々の死＝神殺しと時代の苦悩としての『もののけ姫』

そして、「トトロ」という「森のヌシ神」は『もののけ姫』においては、シン神や乙事主などに分化しつつ、その神性が剥奪され、弱体化されていく中世的変容の過程が描かれている。

これらの宮崎ヌシ神シリーズの元型となるのが『風の谷のナウシカ』（1984年製作）である。そこではトトロの原像は「森のヌシ神」的な存在である王蟲であった。

こうして、宮崎アニメ作品は、「ふるさと」像や地域創造の問題を考えていく上で、いくつもの重要なメッセージを発し、未来に生きる「生態智」の探究実践を促す力となるものといえよう。

#### 4. おわりに～「ふるさとづくり有識者会議」へのいくつかの提案

以上の論点を踏まえて、最後に、議論のためにわたしが考えている「ふるさとづくり」のためのいくつかの各論を提示しておきたい。

- ① 古地名を残し、次世代にきちんと伝える。古地名は、その地域の地質や地形や生態系や地域特性を表わす最大の「ふるさと情報」であり、地域のきわめて重要な歴史民俗文化遺産である。「ふるさとづくり」においては、ぜひ地名を大切にしてほしい。地名については、民俗学者・谷川健一（1921～）の『日本の地名』（正統、岩波新書、1997-98年）を参照されたい。
- ② 老人と子供の施設の合体をはかる。わたしは『翁童論—子どもと老人の精神誌』（新曜社、1988年）以来、日本の社会の中でとりわけ老人と子どもが神聖視されてきた歴史民俗事例を「翁童文化」と概括し、その両者をつなぐ施設（ハード面）と機能（ソフト面）の創発を問題提起してきたが、超少子高齢化社会に突入する「ふるさと」において、この問題は中長期的に大変重要な論点と施策になると思う。
- ③ 防災拠点・安心装置としての伝統文化や地域の寺社を活かす。わたしは、東日本大震災「3・11」後、2011年5月を皮切りに、半年に1度ずつ、被災地沿岸部400～500キロを5度にわたり定期的に巡り、拙著『現代神道論—霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年）、井上ウィマラ・藤田一照・西川隆範・鎌田東二『仏教は世界を救うか』（地湧社、2012年）や拙稿「民俗芸能・芸術・聖地文化と再生」（『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル4 震災復興と宗教』稲場圭信・黒崎浩行編、明石書店、2013年、別紙コピー）などの中で、視察した現地状況を報告すると同時に問題点を指摘してきた。

それらによって明らかになってきたことは、第一に、日本列島の沿岸部の古くからの神社・仏閣は海岸線に近い小高い河岸段丘などに立地していることが多く、東北被災地の津波浸水線上に多くの神社があり、避難所になっている事実とその安全・安全装置としての機能であった。第二に、延喜式内社などの各国（都道府県）主要古社は、縄文遺跡など先史時代の遺跡および古代遺跡と近接し、縄文時代からの信仰と切り離せないこと。第三に、東北（陸奥国）延喜式内社100社の内、石巻市や女川町のある牡鹿半島に10社も密集していることが地震や津波などの自然災害の多発を関係があると考えられること。第四に、それに関連して、伊豆国に92座の延喜式内社があることの意味も、地震や火山の噴火などの自然災害と密接な関係があることと推定できること。第五に、日本を代表する「日本三大祭り」の一つに挙げられている「祇園祭」の発生が貞観11年（869）に起こった貞観地震を直接的な契機としてしていると考えられること、などが徐々に明らかになってきた。

こうして、日本列島に生まれた神社・仏閣など「聖地・霊場」が、自然の恵みに深く依拠し、それに対する敬虔なる畏怖・畏敬の念を以って維持されてきたことの地質学的・生態学的・自然地理学的意味を再確認し、日本の「癒し空間」（聖地・霊場）の具体例といえる延喜式内社が、自然災害の襲来（「祟り」とも捉えられた）に対する防災・安心・安全装置や拠点でもあったことを一定程度論証できたと考えている。

「地名」の大切さとも関係するが、このような、地域の「聖地・霊場」や「伝統芸能」を含む伝統文化の地域文化財を、ぜひ今後の「ふるさとづくり」に有効に活かしてほしい。

- ④ 地域社会のつなぎ手として、市民参加型の「社会公共コーディネーターズ」ないし「地域ネットワークカーズ」のグループを作り、NPO 法人や NGO 団体、社会福祉士、臨床心理士、医師、教師、大学教授、神職、僧侶、神父・牧師など地元宗教家や博士号を取得した若き専門家やコンサルタントなども交えた地域づくりの多様な担い手を育成し、活用してほしい。島根県隠岐島海士町の山内道雄町長は、『離島発 生き残るための 10 の戦略』（日本放送出版協会生活人新書、2007 年）の中で、関満博一橋大学教授の『『若者』『馬鹿者』『よそ者』があれば町は動く』（150 頁）という言葉を紹介しているが、新しい発想と行動と持続的展開があれば確実に地域が活性化する。そうした諸事例を参考にしつつ、独自の魅力的な地域づくりを開拓していく。そのためにも、地域の魅力と資産の自己認識と自己点検と自己展開が必要になる。それは、いわば、8 世紀に編纂された各国（都府県）「風土記」に続く、21 世紀の「平成風土記」（地域資産簿）の編纂となるだろう。
- ⑤ これに関連して、『京都府/京都大学こころの未来研究センター共同企画 平成 24 年度報告書』（京都大学こころの未来研究センター、2013 年 3 月刊）の中で、久高中学校（沖縄県南城市久高島）と西賀茂中学校（京都市北区）と和知中学校（京都府船井郡京丹波町）との 3 校の「地元自慢文化交流授業」の事例報告をしたように、学校教育の中で地域間交流事業として「地元自慢交流授業」を進めるのも一案であろう。自地域文化と他地域文化との学び合いの中から冷静に地元を見つめる目を育み、敬愛の念を以って他者を見つめる目を深めていく中から、寛容でありつつその地域の中で暮らし生きていることの意味と未来をとらえ直す機会と経験を持つことになるだろう。いじめをなくす特効薬などないが、それぞれが生きている場に長い時間をかけて歴史的な地域個性が形成されてきたことを身を以って実感することは自他を尊重する大切な契機となるだろう。
- ⑥ 「ふるさとづくり」の政策の実施とともに、そのような政策を中長期的に批判的にも検討・検証できるシンクタンクとして、「ふるさとづくり研究センター」（仮称）の設立を望みたい。

以上、「ふるさとづくり有識者会議」の第 1 回目の議論のたたき台を提示したので、活発な議論と提案を心より期待する。

注

- ① 長谷川敏彦（日本医科大学教授・公衆衛生学・医療管理学・医師）は、近年、「生存転

- 換」論を唱えている。長谷川は、日本社会の近代の流れを、1) 土地とりゲーム（明治維新：軍事大国）～外からの脅威：外国に合わせて国を作る、2) 金とりゲーム（昭和敗戦：経済大国）～すべての破壊から：仕事に合わせて人を作る、3) 年とりゲーム（高齢大国：平成転換）～人に合わせて社会をつくる、という 3 つの大変化としてとらえ、未曾有の少子高齢化社会をポジティブに乗り越えていく道と方法を問題提起している。
- ② 京都・平安京の「小盆地宇宙」について、詳しくは、鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010 年、鎌田東二編『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とところ』創元社、2011 年、を参考にしていきたい。
- ③ 以下のトトロについての文章は、近刊予定の『ジブリの教科書 3 となりのトトロ』（文春文庫、文藝春秋、2013 年 6 月刊予定）に収めたエッセイ「鎮守の森のトトロ論」と一部重複していることをお断りしておきたい。

#### 参考文献：

- 益田勝実『火山列島の思想』筑摩書房、1968 年（ちくま学芸文庫、1993 年）
- 米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店、1989 年
- 谷川健一『日本の地名』正統、岩波新書、1997-98 年
- 山内道雄『離島発 生き残るための 10 の戦略』日本放送出版協会、生活人新書、2007 年
- 鎌田東二『翁童論—子どもと老人の精神誌』新曜社、1988 年
- 鎌田東二『老いと死のフォークロア—翁童論Ⅱ』新曜社、1990 年
- 鎌田東二『エッジの思想—翁童論Ⅲ』新曜社、2000 年
- 鎌田東二『翁童のコスモロジー—翁童論Ⅳ』新曜社、2000 年
- 鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波現代文庫、2001 年
- 河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新書、朝日新聞出版、2008 年
- 鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008 年
- 鎌田東二『神と仏の出逢う国』角川選書、角川学芸出版、2009 年
- 鎌田東二『超訳 古事記』ミシマ社、2009 年
- 鎌田東二編『持続千年首都・平安京のコスモロジー』創元社、2010 年
- 鎌田東二編『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とところ』創元社、2011 年
- 鎌田東二『現代神道論——霊性と生態智の探究』春秋社、2011 年
- 鎌田東二編『日本の聖地文化—寒川神社と相模国の古社』創元社、2012 年
- 鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川選書、角川学芸出版、2012 年
- 鎌田東二・玄侑宗久『原子力と宗教—日本人への問い』角川 one テーマ 21 新書、角川書店、2012 年
- 井上ウィマラ・藤田一照・西川隆範・鎌田東二『仏教は世界を救うか』地湧社、2012 年
- 星野紘『過疎地の伝統芸能の再生を願って—現代民俗芸能論』国書刊行会、2012 年

高世仁・吉田和史・熊谷航『神社は警告する—古代から伝わる津波のメッセージ』講談社、  
2012年

稲場圭信・黒崎浩行編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル4 震災復興と宗教』明石  
書店、2013年

『京都府/京都大学こころの未来研究センター共同企画 平成24年度報告書』京都大学こ  
ころの未来研究センター、2013年3月刊

## 延喜式内社

山陰道	560座
丹波国	71座
丹後国	66座
但马国	131座
因幡国	60座
伯耆国	6座
出云国	187座
石见国	34座
隠岐国	16座

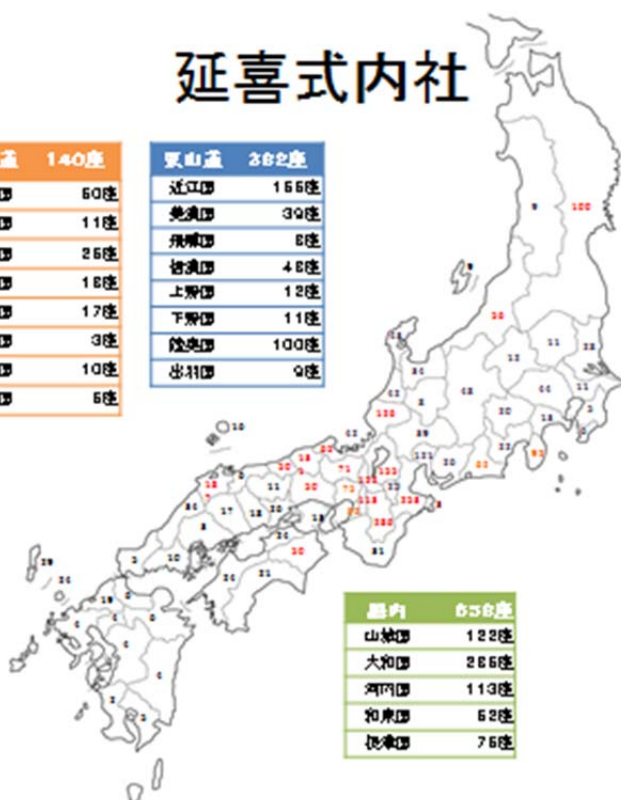
西海道	163座
肥前国	31座
筑前国	13座
阿苏国	60座
筑后国	24座
伊豫国	24座
土佐国	21座

西海道	107座
筑前国	19座
筑後国	4座
豊前国	6座
豊後国	6座
肥前国	4座
肥後国	4座
日向国	4座
大隅国	6座
薩摩国	2座
吉岐峰	24座
對馬峰	29座

山陽道	140座
備前国	60座
美作国	11座
備后国	26座
備中国	18座
備前国	17座
东美浓国	3座
周防国	10座
石門国	6座

关东道	382座
近江国	166座
美浓国	39座
飛騨国	8座
信浓国	48座
上野国	12座
下野国	11座
陸奥国	100座
出羽国	9座

畿内	658座
山城国	122座
大和国	266座
河内国	113座
和泉国	62座
摂津国	76座



北陸道	252座
若狭国	42座
越前国	126座
加賀国	42座
能登国	43座
越中国	34座
越後国	66座
佐渡国	9座

关东道	721座
伊豆国	26座
伊勢国	263座
志摩国	3座
尾张国	121座
三河国	26座
遠江国	62座
駿河国	22座
伊豆国	92座
甲斐国	20座
相模国	13座
武藏国	44座
东奥国	6座
上野国	6座
下野国	11座
常陸国	28座

## 水神系式内社

山陰道	
丹波国	1社
丹後国	1社
但马国	6社
因幡国	1社
伯耆国	0社
出云国	6社
石见国	0社
隠岐国	1社

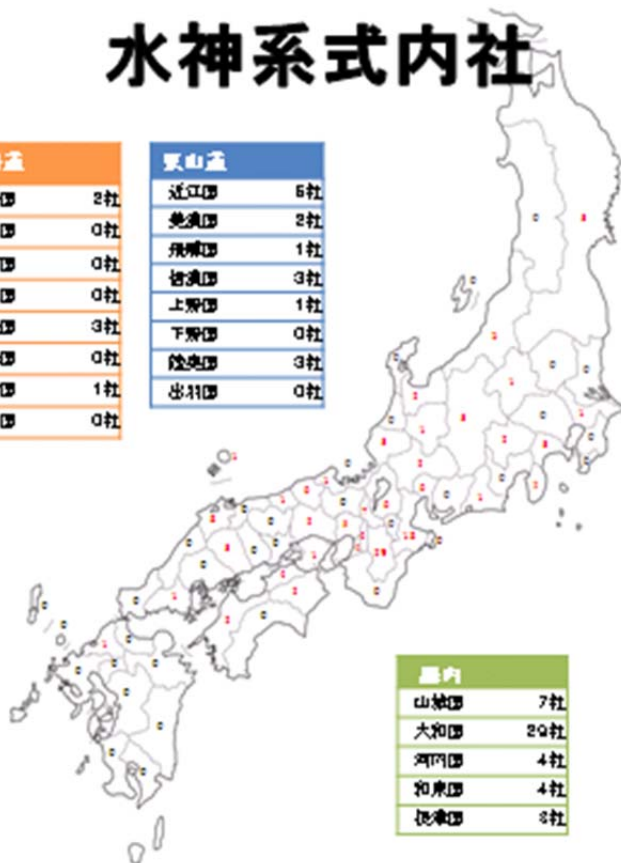
西海道	
肥前国	0社
筑前国	1社
阿苏国	2社
筑后国	4社
伊豫国	2社
土佐国	0社

西海道	
筑前国	1社
筑後国	0社
豊前国	0社
豊後国	0社
肥前国	0社
肥後国	0社
日向国	0社
大隅国	0社
薩摩国	0社
吉岐峰	0社
對馬峰	0社

山陽道	
備前国	2社
美作国	0社
備后国	0社
備中国	0社
備前国	3社
东美浓国	0社
周防国	1社
石門国	0社

关东道	
近江国	6社
美浓国	2社
飛騨国	1社
信浓国	3社
上野国	1社
下野国	0社
陸奥国	3社
出羽国	0社

畿内	
山城国	7社
大和国	29社
河内国	4社
和泉国	4社
摂津国	8社



北陸道	
若狭国	0社
越前国	3社
加賀国	0社
能登国	0社
越中国	2社
越後国	6社
佐渡国	0社

关东道	
伊豆国	0社
伊勢国	18社
志摩国	0社
尾张国	6社
三河国	0社
遠江国	1社
駿河国	0社
伊豆国	2社
甲斐国	2社
相模国	3社
武藏国	0社
东奥国	0社
上野国	0社
下野国	1社
常陸国	0社





陸奥国延喜式内社 100 社と東北被災地の沿岸部の延喜式内社